

京都府の舞鶴市農業委員会（石束輝己会長）では、2012年7月から委員会内に「有害鳥獣対策部会」を設置。これまでも市内に三つある猟友会支部との意見交換会や勉強会などを開催し、各集落でも農業委員と農事組合長らが中心となり、防護柵の設置や捕獲を進めている。

関本長三郎部会長（73）が「13年前に農業委員になって最初に取り組んだのが鳥獣害問題」。ちょうど猿による農産物被害が深刻化し始めた頃だった。06年には被害額の半数以上を占める市内3地区で全戸を対象に猿の出没調査を行った。調査報告会を開いたとき、参加者から「実態を調べるの

京都
舞鶴市農業委員会

「有害鳥獣対策部会」を設置

はいいが、捕獲してくれないと被害はなくならない」といった意見が相次ぎ、もやもやした違和感を感じたという。

行政に全てを頼るのでなく、住民一人一人が自らのこととして行動しないと問題は解決しないと、09年にはJA舞鶴東支店、舞鶴東猟友会と共催し、府・市、商工会な

だ。農業委員会の泉清毅副会長（75）の地元であ

とも巻き込んで「サル対策を考えるシンポジウム」を開催。その後、有害鳥獣対策部会を立ち上げて活動を本格化させてきた。今秋からは、住民が幅広く参加する有害鳥獣対策交流会を計画している。

各集落の動きも活発だ。農業委員会の泉清毅副会長（75）の地元であ

だ。農業委員会の泉清毅副会長（75）の地元であ

住民自らの行動が不可欠

る西方寺平集落では、猪や鹿による水稻、野菜などの被害が多発していた。そこで、全戸が参加する「農事組合」が10年に中山間地域等直接支払交付金を活用して、集落

同集落は新規就農者の受け入れに熱心。全11戸のうち4戸が市外からの新規就農で2戸はUターン。「平均年齢40歳で、高齢化率は25%」と笑う

鳥獣被害は出さない」と力を込める。



集落入口のゲート前で関本さん（左）と泉さん。夜間は住民が交替で開け閉めする